

# 岩手県 2011.3.11 東日本大震災津波の記録



# 普代村



## 1 地震・津波の概要

- 震度—震度5強(5.3)／普代村銅屋
- 津波痕跡高—18.4m／普代海岸
- 浸水面積—0.5km<sup>2</sup>未満
- 死者—0人

- 行方不明者—1人
- 負傷者—1人
- 家屋倒壊—0棟
- 災害廃棄物等推計量—1.1万トン

普代村における大震災津波における死者は0人（※なお、被災当時の居住地を基準とした場合の死者数は7人：普代村調べ(平成24年3月31日現在)）であった。普代村では、主要産業の一つである漁業関連に甚大な被害が生じた。普代村漁協の被害は、建物など43棟、船舶8隻等で8億8,199万円となっているほか、漁家等の倉庫・加工場など84棟、船舶522隻、養殖ワカメ・コンブ等で17億6,658万円の被害が発生している。公共被害は、建物16棟、河川・道路9カ所などで8億1,100万円となっている。全体で37億8,379万円の被害となったものの、住宅等にはほとんど被害が及ばなかった（被害額は平成23年4月20日現在）。

## 2 村を守った普代水門

普代村でも、過去の津波で甚大な被害を受けており、明治三陸津波では犠牲者302人、昭和三陸津波では犠牲者137人に及んでいる。このため、県と普代村では、津波から住民を守るために、普代浜に普代水門、太田名部漁港に太田名部防潮堤を築き、津



普代村を守った普代水門。津波は水門を越えたが、被害を最小限にとどめた 写真提供／岩手日报社



太田名部漁港は壊滅的な被害を受けたが、防潮堤の内側に浸水することはなかった 写真提供／岩手日報社

波へ備えてきた。

普代水門（総延長 205m）と太田名部防潮堤（総延長 155m）は、それぞれ昭和 59 年、昭和 42 年に完成した。

普代水門と太田名部防潮堤の建設に当たり、特筆すべきは、ともに 15.5m という高さにこだわった点である。計画時には、防潮堤等の一般的な高さは 10m 前後とされていたが、当時の和村幸得村長（故人）等の強い要望によりこの高さとなった。過度の高さという批判もあったが、和村村長は「過去の 2 度の津波で受けた不幸を再び繰り返してはならない」という強い信念の下、周囲の反対を押し切って、東北一とも言われる高さの水門・防潮堤の建設へと尽力した。

普代村の中心部は、普代川に沿って形成されており、この普代川河口から約 300m 上流に建設された普代水門は、今回の津波を村中心部に到達させることなく、村の被害を最小限にとどめた。

普代水門に到達した津波は 15.5m の水門を越える規模のものであり、水門の管理橋に一部損壊した箇所が確認されたものの、水門自体は決壊せず、浸水はほぼ河川区域内だけに抑えられた。水門のすぐ上流には普代小学校、普代中学校があったため、水門が津波を止めることができなければ、大きな被害

が発生した可能性もあったと考えられている。

高さ 15.5m の太田名部防潮堤を襲った津波は、高さ 14m の位置で止まり、住宅地への浸水を食い止めた。防潮堤外側の漁港では、壊滅的な被害となったものの、防潮堤内側は浸水に至らず、民家の浸水被害は皆無であった。こうした普代村の津波に対する備えは国内外から賞賛されている。

### 3 和村村長の言葉

和村村長は退任に当たり、村職員にこう呼び掛けたという。「村民のため確信を持って始めた仕事は、反対があっても説得してやり遂げてください。最後には理解してもらえる」。この言葉からも、建設当時の反対の声がいかに大きかったかがうかがえる。当時建設課職員だった深渡宏村長（大震災津波当時）は「和村村長は正しかった。たいへんな財産を残してくれた」と語っている。

### 4 主な公共施設の被害

- 消防防災施設——一部損壊：普代水門管理橋、情報連絡無線 9 基

（参考資料—普代村「普代村災害復興計画」、「広報ふだい」、国土交通省「東日本大震災の被災状況に対応した市街地復興パターン概略検討業務 普代村調査総括表」、北海道新聞 4 月 7 日記事）